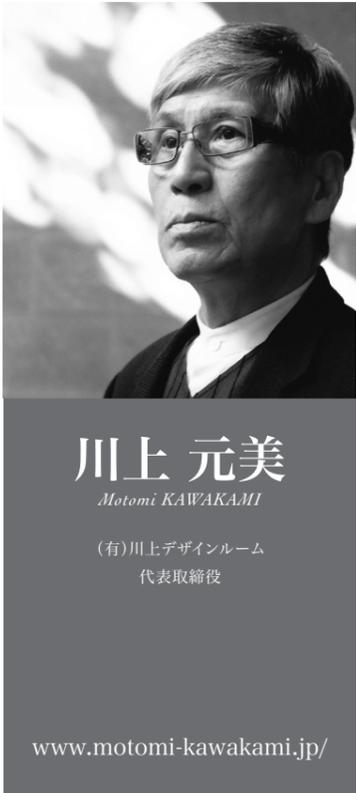


人に寄り添う空間づくり 暮らしに「美」を生むデザイナー



「箸から橋までをデザインするデザイナー」と呼ばれ、広範なプロダクトを制作する川上元美氏。ジャンルを問わず多くの作品を創る源泉は「美」へのこだわり。その根幹にあったのは人間への興味だった。あらゆる環境物を人間に向けてデザインする。

ポードールレスなモノ作りを学んだ学生時代

幼少期から図工やデザインに強い興味がありました。当時親がエンジンニアで色んなオモチャを作ってもらったりしていたのでその影響もあります。中学時代は、エンジンで翔ばす模型飛行機を作ったりしていました。

東京藝術大学に入学した1960年は安保の年で、学校のカリキュラムの改変など変革の時期で、私はデザインを学びたくて入学したところ、こ

得ても、誰も使ってくれないこともあり、その反省も含めて日常的なものに力を入れるように心掛けました。

当時、家電やMS-DOSや鑽孔テープ方式のコンピュータなどの製品デザインもしていましたが、技術が進化する度にブラックボックスが変化していく、時代の変わり目。ものが完成すると、愛でる時間すらありません。そのような体験から機器ではない家具や生活道具など、より人に寄り添う環境デザインを志向するようになりました。「鶴見つばさ橋」もその一つかもしれません。

また、80年代半ばからは地場産業の方々とかかわるようになりました。東京一極集中が進む中、地方の産業などを大切に伝えようという町おこしの気運が高まってきました。大企

の年に、ID、VD、铸・鍛・彫金、陶芸、テキスタイル、漆芸などが、工芸科

として統合され、2年半の間、私はその二期生として様々な分野を体験しました。当時の経験が基礎になっており、デザイン教育という観点では非常に良い時代であったと思っています。

水谷武彦直々のバウハウス構成原理の講義、内藤四郎、三井安蘇夫、松田権六、加藤土師萌、内藤春治、鈴木盛久（貫爾）など、人間国宝を始めとす

る、時の工芸界重鎮の背中を見て教わるという、貴重な体験を積むことができました。デザインのコンセプト作りもさる事ながら、モノ作りの裏づけとして伝統的実材や技術に触れられた経験は私の宝物です。そして大学院生時代は、学際領域を埋める環境デザイン学科の創生時期で、また異なつた新しい空間への視点は印象

業には無い面白さが地方の中小企業にはあります。ただ下請けの体質で、独自の開発力の無いところが多い中で、共に汗を流したこともありまし

た。日本デザイン振興会は当時、Gマーク選定事業と地方デザイン開発推進事業の二本柱での活動が行われていましたが私もその一環として、飛騨高山地区の家具産業のデザイン開発事業にかかわつたのが最初でした。2年がかりで商品開発と新しくできた新宿NSビルでの発表をプロデュースしたのがきっかけで、現在も各社との付き合いが続いています。

地場産業を盛り上げるには、地元が目利き人を見つけないと進行しません。90年から始まった「国際家具デザインコンペティション旭川」への参画

的なことでした。

在学中にイタリアの建築家「アンジェロ・マンジャロッティ1955―64」の作品集に出会った時は目から鱗。それは都市計画や建築からID、家具、クラフトまで、一人の人間が幅広く手がけているのですが、見事に一つの個性で貫かれている。これがデザインだ！これは是非とも触れなければならぬとマンジャロッティ事務所でも働ける伝を探りました。すると、偶然にも事務所の人員に空きができたよう

なもので行つてからも大変でしたが、面白い経験でした。建築からランプのデザインなど、ジャンル問わず、様々なデザインを担当しました。また休日を返上して事務所で私的なコンペに出すための作品づくりに没頭してもそれを受容してくれる人でした。

地域産業を盛り上げたい

家具は素材から69年に帰国、日本が高度経済成長からバブルに向かう時期の71年に事務所を構え、様々なメーカーと仕事を始めました。イタリアのアヴァンギャルドな作風の影響と、国内状況との隔たり故か、展覧会で前衛的なものを出品すると、面白いと賛同を

を通じて、旭川の家具産業の発展のお手伝いをしてきましたが、そこには、地元の歴史や文化に精通するカリスマ社長の存在があり、家具づくりの街として注目を集め、来年30年目で第10回を数えるトリエンナーレ形式のコンペティション「国際家具デザインフェア旭川」は世界で認知されています。

またここでは植林活動も行われています。もともと旭川地方には家具に適したみず榎の木が多く自生していました。しかし、家具産業の発展の前に、素晴らしい榎材をデンマークなど北欧に輸出をして、当地の家具産業が盛んになり始めた頃には少なくなつていたのです。そこで、遅ればせながら榎材などの植林が始まり、業界の所有する山林には全て植えつくし、

■かわかみ もとみ プロフィール

有限会社川上デザインルーム 代表取締役

略歴

1940 兵庫県に生まれる。
1964 東京藝術大学美術学部工芸科(デザイン専攻)卒業。
1966 同大学院美術研究科修士課程修了。
1966～69 アンジェロ・マンジャロッティ建築事務所(ミラノ)勤務。
1971 川上デザインルーム設立、現在に至る。

日常ワークとして、クラフト、プロダクト、空間、環境デザインなどの仕事を手がけている。東京藝術大学、金沢美術工芸大学、多摩美術大学、神戸芸術工科大学の客員教授を歴任。

受賞歴等

日本インテリアデザイナー協会協会賞
アメリカ建築家協会(AIA)主催
インターナショナル・チェア・デザインコンペティション1席
(※BLITZ)
毎日デザイン賞
国井喜太郎産業工芸賞
土木学会・田中賞(※鶴見つばさ橋)
横浜まちなみ景観賞
グッドデザイン賞金賞
IF賞 等

展覧会

「ハイブリッド、そして光と影と展」(TOTOギャラリー・間)
「インダストリアル・シンフォニー展」(原宿クエストホール)
「デザイン国際化時代のバイオニア展」(武蔵野美術大学)
「MOTOMI KAWAKAMI CHRONICLE 1966-2011 川上元美 デザインの軌跡展」
(OZONEパークタワーホール)

著書

「雅致―川上元美の家具」(六耀社)
「川上元美―ひとと技術をつなぐデザイン」
(アムズ・アート・プレス)
「現代デザイン事典」(平凡社/共著)

近年は荒れて放置されている山林の所有者を探し出して、植林と管理をする代わりに育った木を使用する了承を得るといふ、孫の世代までにかかわる長い活動が始まり10数年。今年5月に「植林ツアー」を計画中。

杉問題は我国全域の問題です。宮崎県でも、杉を通して町おこし活動のお手伝いを10年ほど続けています。

その場にいる人達は身近にある資産に気づいていない場合が多いのです。町おこしのためには、土地に住む人の気づきを促し、住民を巻き込んでいくことを意識しています。例えば杉という素材を生かした道具作りを地域の方々に示していくことも一つです。やはり産業を通じた地域での基盤づくりが大事だと思います。

椅子から考え、人と環境を伝えていく

デザインの分野が細分化されすぎてランドスケープ、建築、インテリア、プロダクトなど社会環境として捉えることが欠如しています。一方でデザイン教育も観念的部分を学ぶことが多く、実際にモノを作って素材と触れ合う機会に今の学生は恵まれていません。多摩美術大学環境デザイン学科で客員教授をしていた13年間、

学生各自が設計した住宅に向けたダイニング・チェアを8週間かけて、工房で実物を作ったというカリキュラムを実施してきました。椅子は、非常に人間的で、建築や環境のデザインとも繋がっていきます。実作を体験することで、素材を知り、人と空間との関係性を実感して欲しいと考えたもので、学生に人気の授業でした。

科学技術が進展する一方で、デザインにはアナログな感性こそ要求されます。若い人たちにはその中で様々な経験をしながら、バーチャルな思考に対して複眼の構えを持たなければならぬと思っています。

空間デザインという自己表現

今は様々なことがドラステックに変わっていく時代です。しかし、その変化を繋いでいくことが重要です。

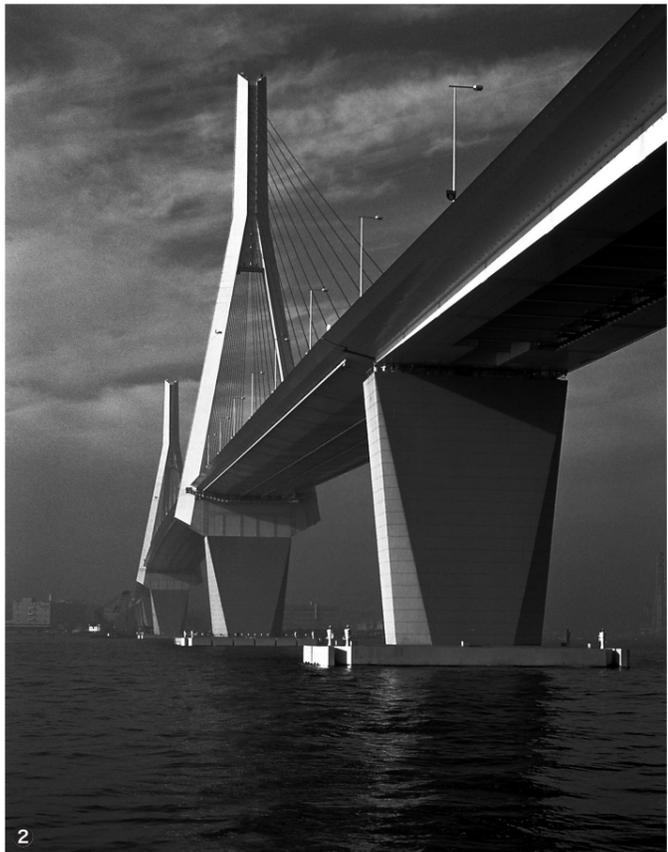
私はデザインとは、その問題解決を促した社会に働きかけていける存在だと思っています。デザインはアーートの側面もありますが、日常の環境や道具となつてこそそのデザインです。しかし、単なる利便性を持つのみのものでなく、最終的には「ものの姿」を伴っていないと必要ありません。椅子一つとっても、座るといふ機能

だけではなく、それを取り巻く文化があります。椅子の背が高ければ相手に与える印象も違います。たかが椅子、されど椅子。椅子への視点は私の原点です。

ただこの産業のネックになっているのは住宅問題です。一般的な都心の住宅は狭くて、デザイン性という部分は軽視されがちです。居住空間はある意味自己表現の場でもあるので、人々を呼んでパーティをする機会でもあればいいのですが、そういう習慣も日本ではあまり根付いていません。しかも、今の若い世代は熱狂しない世代とも言われています。

ただ、2020年のオリンピック・パラリンピックは一つの契機となるでしょう。多くの人が訪れ、そこから新しいライフスタイルが芽生えていくかもしれません。また観光客が日本の地方を巡り、美しい山野風景や歴史遺産の素晴らしさを体験し、リピーターとしてゆつくりと逗留する魅力創りが重要です。

今後は、もつとパブリックなデザインを手がけたいと思っています。例えば、公園など人が生きていくステージにヒューマニティを持ち込みながら、周りから要求されるデザインに取り組んでいきたいですね。



①NT (エヌティー) (株)アルフレックスジャパン/1976
積層成型合板のフレームに、背座面は革または布テープの編み込み。シンプルで軽量な小椅子は身体になじみやすい。

②「鶴見つばさ橋」/1994
橋長1kmの1面吊り3径間連続鋼斜張橋。ゲートのシンボル性と人に対する視覚的安らぎを考慮した、遠近の調和とスレンダーで力強いフォルム。

③QUODO・LUX「クオド ラックス」 (株)カンディハウス/2004
「日本の上質、品格」をテーマに作り込んだソファ。昨年、自由な組み合わせができるシステムソファ「クオド」へと進化している。

④STEP STEP (Stool and Shoehorn) 日進木工(株)/2008
靴べらと合体したスツール。上り框の低い女関で愛用している。差し込んで揺れる姿が、「イッテラッシャイ」と手を振るよう。